

はしがき

前世紀に続き21世紀もまた、厳しい競争の時代であり、国家間、都市間の競争は、否応なく大地や大海の資源をどう利用し運搬するかという広漠とした問いを発する。以前に比べ多くの人々が自由に空を飛び情報を集める時代にあっても、国家や都市は、地面から離れられず、物流の多くは未だ海路に依存している。地球上の多くの人々にとって、どこに生まれるかは、幸福や艱難^{かんなんしんく}辛苦のありようを左右する。それは、気候もさることながら、国家や都市の違いが一生に大きく影響するためである。国家や都市は、その地理的位置によって運命^{ちしつ}づけられている。その運命を知悉するには、学問の力が必要である。

激しさを増す国家間・都市間競争が求める学問が新しい地政学である。例えば兵庫県には多くの温泉がある。観光客争奪のライバルは、もはや関東や四国の温泉ではなく、バリやグアムとなっている。大阪のライバルはもはや東京というより上海である。このように観光面でさえ、国境を越えた競争^{リージョン・ワイド}が地域規模で拡大している。それだけではない。石油・ガスや5G・インターネット回線をめぐる競争も拡大の一途を辿っている。ただしこちらは都市間というよりは、未だに国家間である。加えて東日本大震災の惨禍以降、日本は、エネルギー政策を転換し、海外の資源には再び耳目が集まった。

本書は、地政学的観点から、資源をめぐる国際政治を追うものである。本書は、3部で構成される。第I部は、資源の輸送をめぐる貿易障壁についてである。接続性(connectivity)という概念で近年説明される地政学的経路や障壁について、単なる地理的障害ではなく道路、鉄路、パイプライン、航路等のルートが政治的、経済的に有する意味^{ふかん}を俯瞰する。

第II部は、資源貿易と政治体制の構図についてである。民主的平和論をもとに、民主主義体制や権威主義体制といった体制の差違は、資源輸送に影響するものかを問いかける。

第III部は、資源貿易と民族問題の構図についてである。独立後電力自立が困難になっている旧ソ連の中央アジア諸国などの事例を第8章で考える。また内

陸国ボリビアを中心に南米の国境を超える資源輸送・輸出の事例について第9章で深く追う。

この問題認識にもとづき資源をめぐる争いを地政学から考えるのが本書の目的である。本書を通じて、限りある地球の資源を争奪の対象から共同開発と衡平な分配と利用の対象に変えていく時代の幕を開けたい。この難題に読者諸氏とともに挑戦したい。

(なお本書は、科学研究費補助金基盤研究(C)「資源通過国の資源紛争当事者化についての研究」とともに立命館大学国際地域研究所の重点プロジェクトの成果の一部である。)

編 者